

環境研ニニ百科

第98号

動物と人の新しい関係

【動物と人の関係はさまざま】

喰うか喰われるか。

動物と人との関係のはじまりは、このような単純で殺伐とした関係だったでしょう。やがて人は、その活動の幅を広げ、文化を多様化させ、動物とさまざまな関係を築いてきました（本稿中の「動物」は主に「ほ乳類」を指します）。野生の動物との関係としては、食糧や衣服の材料として捕る（イヌイットのアザラシ狩り）、スポーツとして狩る（スポーツハンティング）、両者が協力して狩りをする（アフリカ原住民とイルカの共同ボラ漁）、信仰の対象とする（北米ネイティブアメリカンのシャチ信仰）などがあります。また、飼育した動物との関係としては、番をさせる（番犬）、食糧や衣服の材料にする（肉牛、牧羊）、乳を食用にする（乳牛）、移動や荷物運びに利用する（荷役馬）、競争させる（競走馬）、闘わせる（闘犬）、鑑賞用や愛玩動物とする（ペット）、人の代替として実験に使う（実験用マウス）などがあります。その関係は本当にさまざまです。

【アニマル・アシスティッド・セラピー】

こうした動物と人の関係のなかで比較的新しく、近年注目を集めているものがあります。動物が人の体や心の具合を良くする、つまり、動物が人を治す・癒す・幸せにする関係です。治癒効果が認められる関係は、アニマル・アシスティッド・セラピー（動物介在療法）と称され「治療」として確立しているものもあります。例えば、馬の背に乗ることは麻痺に伴う神経障害を治すのに有効で、「乗馬療法」として世界的にれっきとした治療とみなされています。

【新しい関係の研究】

治療とまではいかななくても、ある老人ホームではイヌやネコとふれあうことで、それまで全体の4割もいた寝たきり老人がゼロになったという研究報告や、配偶者をなくしてしまった老人の場合、イヌやネコなどのペット（伴侶動物）と暮らしている老人の方が、そうでない老人より長生きしたという研究報告があります。さらに、凄惨な戦場経験から病んでしまった兵士

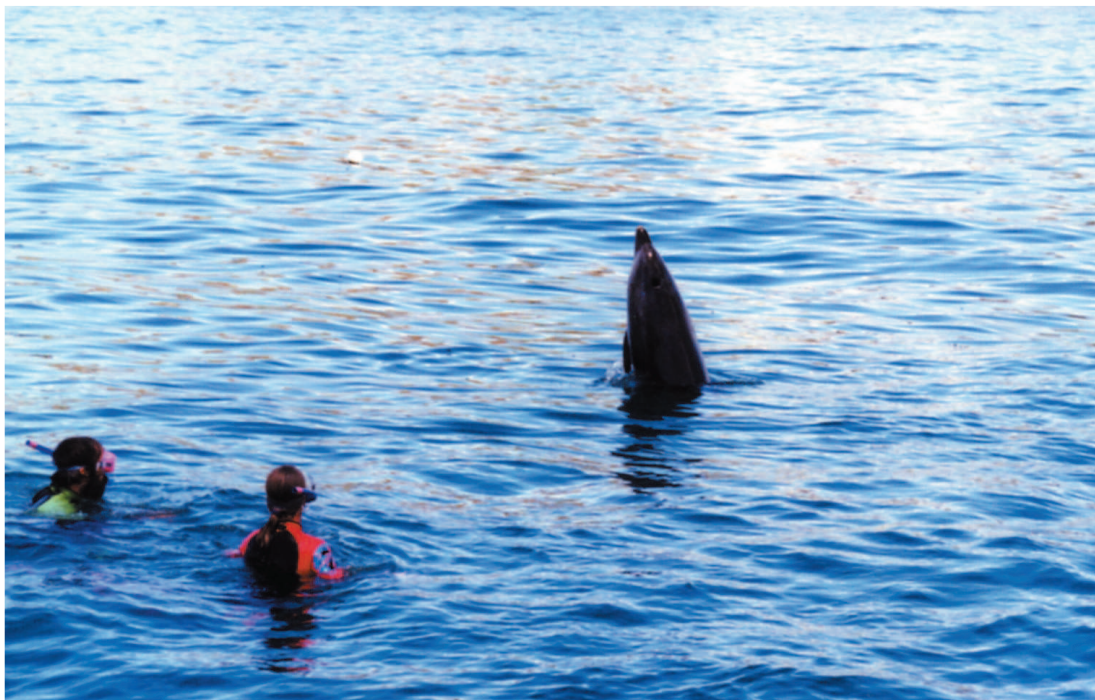


図1 ニューージーランドで泳ぎながらイルカを観る人々。イルカは人を楽しませてくれるが、イルカも楽しめているだろうか。そうであれば、とても素晴らしい関係だ。

の精神状態がイルカと接することで改善するなど、PTSD（心的外傷後ストレス障害）や自閉症の治療プログラムにイルカが参加する例も増えています。

野生のイルカやクジラを観ようという活動も盛んで、世界中で年間100万人以上が参加し楽しんでます。このような観光も広い意味で、動物が人を幸せにしてくれる関係といえます。

人の病気を治し、精神状態を癒し、生活を豊かにしてくれるなんて、本当に素晴らしい関係です。近年、この関係を科学的に研究しようという動きが世界中で起こり、国内でも1994年に『ヒトと動物の関係学会』が設立されるなど、盛んに研究されています。

【動物の負担を考えよう】

しかし、こうした関係には注意すべき点があります。関係を持つ動物が受ける心身の負担です。この負担が大きくなるにつれ、人の治療の効率は下がるでしょうし、咬まれるなどの人の側の危険も増えるでしょう。さらには動物を死に至らしめるかもしれません。こうなってしまうとは動物との関係を保ち続けることは不可能です。イルカを用いたPTSDや自閉症の治療プログラムでも、飼育で増やしているわけではなく、野生で暮らすイルカを捕まえ飼育プールに連れてくることに、非難する声があります。人が飼育できているイヌやネコなどの動物でも、例えば老人ホームで飼われているイヌが、かわいがっているつもりで皆から過剰に与えられた餌で肥満になり、早死にしまう危険があります。人が享受する利益にばかり気を取られるのではなく、動物の負担も考えてこそ、きちんとした関係が築けるのです。

【IT技術が創造する新たな関係】

最近では、こうした負担に配慮して、生きた動物の代わりにネコ型ロボットやアザラシ型ロボットなどが開発され、ロボット・アシスティッド・セラピー（ロボット介在療法）と呼ばれる研究が進んでいます。さらには、動物のバーチャル映像を観せることで、長期

入院患者の病院生活を豊かにしようという試みも始まっています。IT技術が、“動物”とヒトの新たな関係を創造しているのです。

【ミニ地球での新しい関係】

環境科学技術研究所では、小型の人工地球を作り、地球の物質の流れを知るための“ミニ地球”実験を進めています。ミニ地球の中では、2名の居住者と2頭のヤギが、植物が与えてくれる食料を食べて生活します。実験期間の最長である四ヶ月間を、ミニ地球の中に閉じこもり二人だけで暮らすという特異な生活環境です。宇宙への長期旅行のテストとして、同様の閉鎖環境への居住実験がロシアで行われましたが、その際は、小麦の生長が居住者の癒しや居住者間関係の潤滑油になったそうです。ミニ地球実験でも、一緒にミニ地球の住人となるヤギや、食物として育てる植物の生長が、居住者の閉鎖生活を豊かにしてくれる大切な存在となるかもしれません。環境研では、そんな動物や植物と人との新しい関係の広がりも視野に入れ、調査を進めています。

（篠原 正典）



図2 ミニ地球に住む予定の人とヤギ。お互いが良い関係を保つことは、四ヶ月におよぶ閉鎖環境での生活を無事に過ごすうえで大切となるだろう。